（別紙　2）

論文審査の結果の要旨

氏名　　北原妙子

北原妙子氏の学位請求論文“Light and Shadow :A Comparative Study of Henry James and F.Marion Crawford ”（光と陰 - ヘンリー・ジェイムズ、F．マリオン・クロフォード比較研究）は、片や英米文学史上有数の巨匠と目され、片や今日ではほとんど忘れられた大衆作家として片づけられがちな、実人生においても交渉のあった二人の作家の作品を仔細に比較検討することによって、隠れた共通性や影響関係の可能性を明らかにし、文学史上の再評価を迫る斬新な論文である。

性差・人種・階級的に周縁に位置する人々の視点、もしくは純文学に対する大衆文学作者・読者の視点を導入することによって文学史を見直す、という作業は近年英語圏文学研究において盛んに行われているが、クロフォードの場合、ジャンル的には最近研究の盛んな大衆文学に属しこそすれ、階級的には上流階級に属するイタリアで長年暮らした白人アメリカ人ということもあって、こうした新しい流れのなかにあっても見過ごされてきた感は否めない。この論文がそうした作家に着目し、かつ、これまでの文学史において巨匠と祭り上げられてきた（これも普遍的にそう考えられてきたわけではなく、かつての別の「文学見直し」の産物であるわけだが）作家ジェイムズとの興味深い共通点を探っているという点、着眼点のよさが大いに評価できる。先行研究も数少ないクロフォード研究としては国際的に貢献しうることは確実であるし、一大産業となった感すらあるジェイムズ研究に対しても新鮮な光を投げかけることが十分期待できる。少なくとも、純文学の巨匠と忘れられたベストセラー作家、という対比から予想される一連のイメージの不正確さを指摘し、その対比では収まりきらない面を緻密にしている点で貴重である。

たとえば、ジェイムズが現実の人間関係を緻密に描いたとされるのに対し、クロフォードはロマンス的な紋切り型から抜けきれなかったという先入観が一般にあるが、たとえばイタリアにおいて最後まで「よそ者」だったジェイムズがイタリア社会をむしろ積極的にロマンチックに描いて作品に神話的な奥行きを付与している反面、イタリアの実情に通じていたクロフォードは同時代ローマのきわめて現実的・散文的な側面を描いている、といった指摘などは大変刺激的である。

両者は怪奇小説の名手としても知られるが、表面的にはほとんど類似点のないように見える二人の怪奇小説群の中からいくつかの作品を取り出し、舞台設定、怪奇現象と人間心理の関係などに意外な共通点を指摘し、そこからかえってあわらになる両者の文学的関心のありようの相違を明らかにしている箇所なども示唆に富んでいる。

両作家の作品を比較検討するにあたって、やや筋立ての比較に頼りすぎるきらいはあるが、少ない根拠で大きな主張を企てたりはせず、伝記的事実も参照しつつ、あくまで作品自体を同一の場に並べて言えることだけをきっちり言うことに徹し、それによって相当の新しい見識を提供している点、高く評価できる論文である。英語も非常に明快である。

よって本論文は博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績であると判断する。